

中学校教師から捉える対生徒関係：日・韓比較研究 を中心に

宋, 映沃

Graduate school of human-environment studies, Kyushu university

針塚, 進

九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/895>

出版情報：九州大学心理学研究. 4, pp.111-115, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



中学校教師から捉える対生徒関係

—日・韓比較研究を中心に—

宋 映沃 九州大学大学院人間環境学府
針塚 進 九州大学大学院人間環境学研究院

Relation with students from the perception of teachers in junior high school —On the comparison of Japanese with Korean—

Youngok Song (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Susumu Harizuka (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of the present study is to investigate the relationships with students from the perception of teachers in junior high school and compare Korean teachers with Japanese teachers. The Questionnaires were administered to 81 Korean teachers and 51 Japanese teachers in junior high school. The results are as follows. 1) The Korean and Japanese teachers showed 2 common factors by factor analysis : understanding against students, a difficulty of guiding for students. In addition, the only Korean teachers showed the other factor which is strict guiding. 2) The Korean teachers did not indicate the difference of factor's scores among the group which is classified according to career. On the other hand, the Japanese teachers showed the difference of all factor's scores according to length of career.

Keywords: relationships with students, junior high school teachers, comparison of Japanese with Korean

問題と目的

現在の学校を取り巻く状況は不登校、いじめ、校内暴力、学級崩壊など生徒の学校生活に関する問題や悩みが後を絶たず、教育現場ではその対応に苦慮する教師が増え続けている。教師の問題に対応するため生徒の学校生活において影響を与えると思われる要因、つまり対友人関係、対教師関係、家族関係、そして学業など様々な視点から研究がなされてきた。

古市(1994)は、小学生と中学生の学校生活享受感を検討し、級友適応・教師適応・学業適応・家族適応の4側面を取り上げ、とりわけ級友適応の良否が学校生活享受感に大きく寄与することを明らかにした。また、小林と仲田(1997)は、小学生の学校享受感に影響を及ぼす教師の指導の影響について研究を行い、子どもたちが教師を「明朗で信頼に足り、自分と密接な関係を築くようにしている」と感じている場合に学校享受感が高まることを明らかにし、「学校享受感が高い子どもは、教師がいざとなれば自分を援助してくれると意識している」とを指摘している。

藤村・河村(2001)は、児童が認知する学級生活に対する満足度とその生徒の満足感に対する担任教師の認知を比較した結果、担任教師は学級生活に対する児童の満足度を低く捉えていること、5年以下の教職経験の短い担任教師と16年以上の教職経験の長い担任教師は児童認

知と教師認知とのずれが大きいことが示唆された。教師は学級に対する子どもの満足感に対して、自覚的に捉えられていないこと、つまり教師自身の持つ構えによって推論する過程が含まれやすいことなど、教師の歪んだ児童理解の危険性が指摘されている(神永, 1991)。

一方、韓国では学校現場を取り巻く問題に取り組む中で生徒の学校適応に影響を及ぼす要因として、対友人関係に限らず、対教師関係、学業、自我尊重感、ストレスとの関連など心理社会的要因を一括して幅広く扱う調査研究が主である(Lee・Jeong, 1999, Jeong, 1997)。宋、針塚(2001)は韓国の中学生における対教師関係を調べたところ、生徒の意識として、先生の指導に対する満足度が低く、反抗的態度や対教師暴力の危険性が伺われた。

教師への態度を国際比較調査(日本、韓国、中国、アメリカ、ニュージーランド、ブラジル)した深谷(1999)によると、アジア圏の韓国、中国に比べ、日本における対教師評価が低いこと、全体的に教師の姿が「教える」から「支える」へと変化していることが示唆された。

教師集団の中では生徒指導に対する意見の違いは大きく、生徒の問題行動を甘やかしとみなし、より厳格な指導が必要であるという意見や、より暖かく受け入れるべきとする意見などさまざまであろう。教師の果たす役割は、生徒の生活に価値を付与し、生活適応に寄与するものであると思われるが、生徒指導のあり方にはその教師

自身の生徒観や教育観が深くかかわってくると思われる。先行研究では生徒を対象とした対教師関係は多くみられるが、教師を対象とした対生徒関係はさほど多くない。特に、韓国と日本はアジア圏の儒教文化を共有しながらも社会文化的な要因の時間的ずれなどから、学校現場でもその影響が反映されるだろう。

そこで、本研究では、学校現場で生徒指導の主体である教師の生徒観や教育観など対生徒関係を日本と韓国の比較の視点から捉えることで、両国の教師における生徒指導への見解や現状を把握することを目的とする。

方 法

調査対象 韓国都市部の7つの中学校教師81名、日本都市部の5つの中学校学校教師51名を対象とした。

調査時期 1999年11-12月。本調査者が学校を訪問し、筆者が口頭で説明した上で休憩時間を利用して質問紙に回答してもらった。

質問紙の作成と内容 韓国版質問紙の作成では、翻訳における信頼性の確保のため、まず日本語で質問紙を作成した後、韓国語へ翻訳を行ない、再び韓国語から日本語へ訳し、比較検討した。調査内容は対生徒関係（生徒観、教育観）を問う項目で日本の先行文献などを参考して作成された。

結 果

1) 韓国における調査の結果

①対生徒関係に関する項目の因子分析

教師の捉える生徒に対する自己認識を問う10項目について

因子分析を行った。その結果、2つの因子で高得点を示した1つの項目を除き、再び因子分析（バリマックス回転）を行った。そこで0.5以下の低い負荷量を示した4,5項目を除き、3因子が抽出された。ただし、因子得点においては、逆転項目に対して操作を加え、高い得点の方が肯定的意味を示すようにした。

まず、〈生徒の話をよく聞く〉、〈生徒の気持ちを理解し、信頼する〉という生徒との信頼関係に関する2項目を「生徒への理解」因子と名付け、〈生徒にとって勉強より大事なことはない〉、〈適切な授業をすれば遅れる生徒はない〉、〈学校規則はきちんと守るべきだ〉、という厳しい生徒指導への信念を表す3項目は「厳格な生徒指導」因子と名付けられた。

最後に〈生徒の気持ちについていけないと感ずることがある〉、〈問題児を指導する際、無力感を感じることがある〉の2項目は「生徒指導の困難さ」因子と名付けられ、韓国の教師における対生徒関係項目の因子分析は「生徒への理解」因子、「厳格な生徒指導」因子、「生徒指導の困難さ」の3因子と命名した（Table 1）。

② 教職年数による因子得点の差

教職年数別に3群（①10年以下、②10年以上、③20年以上）に分け、これら3群間において対生徒関係尺度の因子得点比較するため、各々一元配置分析を行った。

その結果、3因子ともに群間の差はみられず、「生徒への理解」因子では、平均値（5点満点）が①3.89、②3.91、③3.89（ $F(2,78)=0.009$, $p=n.s$ ）を示し、「厳格な生徒指導」因子では平均値が①3.06、②2.94、③3.12（ $F(2,78)=0.867$, $p=n.s$ ）で有意な差はみられなかった。最後に「生徒指導の困難さ」因子でも平均値が①2.41、②2.22、③2.43（ $F(2,78)=0.628$, $p=n.s$ ）を示し、教職年数による因子得点の有意な差は見られなかった。

Table 1
韓国の教師の対生徒関係に関する項目の因子分析（バリマックス回転）

N0.	項目内容	F1	F2	F3
1.	生徒の話をよく聞く	.714	.039	-.028
2.	生徒のきもちを理解し、信頼する	.693	-.083	-.036
* 6.	生徒にとって勉強より大事なことはない	.125	.594	-.098
* 7.	適切な授業をすれば遅れる生徒はない	-.059	.672	.084
* 8.	学校規則はきちんと守るべきだ	.123	-.630	-.086
* 9.	生徒の気持ちについていけないと感ずることがある	-.106	-.066	.597
* 10.	問題児を指導する際、無力感を感じることがある	-.153	.175	.571
	* 逆転項目			
	寄与率	.134	.156	.107
	累積寄与率	.290	.156	.397

2) 日本における調査の結果

① 対生徒関係に関する項目の因子分析

教師の捉える生徒に対する自己認識を問う10項目について因子分析を行った。その結果、2つの因子で高得点を示した2つの項目を除き、再び因子分析（バリマックス回転）を行った。そこで0.5以下の低い負荷量を示した6, 8項目を除き、2因子が抽出された。ただし、因子得点においては、逆転項目に対して操作を加え、高い得点の方が肯定的意味を示すようにした。

まず、<生徒の話をよく聞く>、<生徒の気持ちを理解し、信頼する>、<生徒から尊敬される>という生徒との話し合いや信頼関係に関する3項目を「生徒への理解」因子と名付けた。

次に、<生徒の気持ちについていけないと感ずることがある>、<問題児を指導する際、無力感を感じることがある>の2項目は「生徒指導の困難さ」因子と名付けられ、日本の教師における対生徒関係項目の因子分析は「生徒への理解」因子、「生徒指導の困難さ」の2因子と命名した (Table 2)。

② 教職年数による因子得点の差

教職年数別に3群 (①10年以下, ②10年以上, ③20年以上) に分け、これら3群間において対生徒関係尺度の因子得点比較するため、各々一元配置分析を行った。

その結果、2因子ともに3群間で有意差がみられ、「生徒への理解」因子では、平均値が①3.72, ②3.98, ③4.31 ($F(2,48)=3.655, p<.05$) を示し、教職年数が長いほど有意に高得点を示した。これは教職経験の長い先生ほど<生徒の話をよく聞く><生徒の気持ちを理解し、信頼する>という項目に対して高い自己評価を行った。

「生徒指導の困難さ」因子では平均値が①2.97, ②2.28, ③2.63 ($F(2,48)=3.932, p<.05$) を示し、教職年数による有意差がみられ、教職年数10年以下の教職経験の短い先生が<生徒の気持ちについていけないと感ずることがある>

ある><問題児を指導する際、無力感を感じることがある>項目に対して有意に高得点を示し、生徒指導への困難さは低かった。しかし、教職年数10年以上、20年以下の教師群の方がもっとも困難さを示したことから教師としてのつまずきや戸惑いが予測できる。

考 察

韓国と日本における対生徒関係因子分析の比較

教師の捉える生徒に対する自己認識を問う項目を両国それぞれに因子分析を行った。その結果、韓国については3因子が抽出され、<生徒の話をよく聞く>、<生徒の気持ちを理解し、信頼する>の2項目からなる第一因子を「生徒への理解」と命名し、<生徒にとって勉強より大事なことはない>、<適切な授業をやれば遅れる生徒はない>、<学校規則はきちんと守るべきだ>の3項目からなる第2因子を「厳格な生徒指導」と命名した。さらに<生徒の気持ちについていけないと感ずることがある>、<問題児を指導する際、無力感を感じることがある>の2項目からなる第3因子を「生徒指導の困難さ」と名付けた。

一方、日本については因子分析の結果、2因子が抽出され、<生徒の話をよく聞く>、<生徒の気持ちを理解し、信頼する>、<生徒から尊敬される>の3項目からなる第一因子を「生徒への理解」と命名し、<生徒の気持ちについていけないと感ずることがある>、<問題児を指導する際、無力感を感じることがある>の2項目からなる第2因子を「生徒指導の困難さ」と名付けた。

以上のように、韓国と日本の因子分析の結果、構造の違いがみられた。「生徒指導の困難さ」因子では両国とも項目が一致しており、生徒を指導するにあたっての戸惑いやつまずきは共通して感じられていた。「生徒への理解」因子では<生徒の話をよく聞く>、<生徒の気持ちを理解し、信頼する>の共通項目に加え、<生徒から

Table 2
日本の教師の対教師関係に関する項目の因子分析 (バリマックス回転)

N0.	項目内容	Fa1.	Fa2.
1.	生徒の話をよく聞く	.837	-.180
2.	生徒の気持ちを理解し、信頼する	.844	-.014
3.	生徒から尊敬される	.715	-.162
* 9.	生徒の気持ちについていけないと感ずることがある	.036	.867
* 10.	問題児を指導する際、無力感を感じることがある	-.175	.816
	* 逆転項目		
	寄与率	.297	.229
	累積寄与率	.297	.526

尊敬される項目が日本の因子のみに含まれる。これは生徒の話聞き、彼らの気持ちを理解してあげることで信頼感が形成され、そこから教師へ向かう尊敬の気持ちが現れるということだろう。この項目が含まれてない韓国に比べ日本の方がより生徒への理解が重要視され、「尊敬される」という自己評価まで繋がると思われる。

最後に注目したいところは日本では抽出されず、韓国のみ抽出された第3因子である。「厳格な生徒指導」と名付けられたこの因子は学校規則の遵守や学業の重要性を表したものであり、「適切な授業をすれば遅れる生徒はない」という「教える」立場である教師としての自尊心も伺われる。この因子は、韓国における生徒指導の厳しさや韓国の社会要因の一つである激しい受験競争の一段面を表すものだと見える。日本でこの因子が抽出されなかったのは韓国ほど学業への負担が大きくないことや生徒指導へ向かう教師の認識の違いがあるのではないだろうか。それは両国の生徒たちの抱えている心の問題の違いや教師が出会う生徒のエネルギーの程度とも関連すると思われる。つまり、日本の学校現場ではの厳格な指導より生徒の気持ちを大事にし、受容的態度—カウンセリング・マインド—がより適切だという認識が示唆される。

教職年数による因子得点の比較

韓国と日本の教師群に対して、それぞれ国別に教職年数による群分け（10年以下、10年以上、20年以上）を行い、対生徒関係因子得点の比較を行った。その結果、韓国の教師群は3因子ともに群間の差はみられなかった。ただし、「生徒への理解」因子では3群ともに高得点を示し、生徒に対する自己認識の評価は高く、教師から捉える生徒との信頼関係は良好だといえるだろう。「生徒指導の困難さ」因子では3群ともに得点が低かったことから教職経験に関係なく、指導上の難しさを表している。

つまり、教職年数による対生徒関係尺度の因子得点の差はみられないものの、教師は生徒への理解はできている方だと自己評価しながらも生徒の気持ちについていけないと感じたり、問題を抱えている生徒の指導においての困難さを感じるなどの現実的な戸惑いがあるものと考えられる。

韓国で群間差がみられなかったことに対して、日本の場合、抽出された2因子ともに3群間で有意な差がみられた。「生徒への理解」因子では教職年数の長さにつれて高得点を示し、教職年数20年以上の教師群は非常に生徒とよく話し、生徒から尊敬されていると自己評価していることから経験の蓄積から生徒への理解がより深まったといえる。

しかし、今回の調査は教師の自己評価であり、経歴長群にとって経験の豊富さにより自己評価が高くなる可能性も否定できない。

「生徒指導への困難さ」因子は生徒の気持ちについていけないと感じたり、無力感をもつことがあるということである。「生徒への理解」因子で全体的に高得点を示し、信頼感や理解はできているものと評価したものの、「生徒指導への困難さ」因子では全体的に得点が低かった。これより、教師自身の自己評価と実際の指導・生徒との関わりとの間にずれが生じることや特に問題を抱えている生徒に対する指導への難しさを示した。

また「生徒指導への困難さ」因子で教職経験10年以下の教師群が最も高得点を示したことは問題を抱えている生徒を指導する際、無力感を感じるより積極的な係わりかたや意欲が働いているのではないかと推測できる。教職経験10年以上、20年以下の教師群でもっとも得点が低く、20年以上のベテラン教師群になると、再び高得点を示す。

ここで、注目したいのは藤村ら（2001）の「児童認知とそれを推測する担任教師の認知とのずれについての研究」の結果である。この研究で、5年以下の教職経験の短い教師と16年以上の教職経験の長い教師は児童認知と教師認知とのずれが大きいことが明らかになった。教職経験5年以上、16年以下の中間群に比べ経験の短い教師と経験の長い教師が認知のずれが大きいということは、本研究で経験の短い教師と長い教師が「生徒指導への困難さ」因子で高得点を示し、教職経験の中間群に比べ、困難さを感じないということと関連づけられるのではないだろうか。

藤村の研究では教職経験の短い教師のずれが大きい理由として経験不足が考えられた。教師自身は生徒を理解し、信頼関係を保ちながら生徒指導へ困難をあまり感じないとしても、必ずしも生徒の認知とは一致されない可能性を示唆する。教職経験の短い教師は子どもの目にみえる側面へ注意が向き、その裏面にある心理的側面まで目が届きにくいという解釈が考えるだろう。

以上より、中学校教師から捉える対生徒関係を韓国と日本において調査を行った。

その結果、対生徒関係において両国とも生徒への理解や信頼感の構築、生徒指導における困難さを取り上げていた。そこで韓国の中学校教師は厳格な生徒指導、つまり生徒を学校規則や学業へ結び付ける傾向をみせた。これは韓国において秩序や学問を重んじる儒教の文化が溶け込んでいることが反映されたとも考えられる。さらに、生徒指導を行う際、日本と韓国の生徒のもつ行動特徴や問題行動の様相が違う（古市, 1994, 宋・針塚, 2001）ことからその対応の違いがみられる。

日本の中学生は現状として不登校傾向が目立っており、その心理的側面に着目するとエネルギーが低下し、自分の感情表出が困難であるか、内向的になり無気力さを示すことがある。そのため、生徒と接する時、厳格な指導を

行うより暖かく生徒を受け入れ、彼らの気持ちを大事に捉える姿勢が求められるのではないかと考えられる。韓国の中学生は問題行動としては生徒間暴力やいじめなど非行や反社会的な行動が目立ち、それを統制するルールとして規則を強化するか、学業への重みを重視した生徒指導が行われると思われる。

教師の指導行動や態度に関する問題は重要な検討課題の一つであると考えられる。教師の深い生徒理解に立った全人格的接し方、生徒に対する受容的な態度の対応など、表面的行動よりその背後にある生徒の心に注目すべきであると思われる。日本と韓国の比較研究を通して各々その社会の特徴的な面を反映するところはみえてきたものの基本的に対生徒関係の様相や教師に求められる要望は共通していることから、今後比較研究を通して生徒と教師との関係性についての理解や現状を見直すことは意義があると思われる。

文 献

- 深谷昌志 1999 子どもにとっての教師—国際比較調査から—。児童心理, 12, 97-102.
- 藤村一夫・河村茂男 2001 学校生活に対する児童認知とそれを推測する担任教師の認知とのずれについて
の調査研究。カウンセリング研究, 34, 284-290.
- 古市裕一 1994 学校生活の楽しさとその規定要因。日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 169.
- 伊藤美奈子 2000 教師のバーンアウト傾向を規定する諸要因に関する探索的研究。教育心理学研究, 48, 12-20.
- 伊藤美奈子 1994 学校カウンセリングに関する探索的研究。教育心理学研究, 42, 298-305.
- Jeong,H.H. 1997 青少年期の精神健康と予防。The Korean Journal of Counselling and Psychotherapy, 16, 98-119.
- 神永典郎 1991 教師の子ども理解と生徒指導。福村出版, 209-212.
- 小林正幸・仲田洋子 1997 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響力に関する研究。カウンセリング研究, 30, 207-215.
- Lee,K.A.・Jeong,H.H. 1999 ストレス, 自我尊重感及び教師との関係が青少年の学校適応に及ぼす影響。The Korean Journal of Counselling and Psychotherapy, 11, 213-226.
- 宋映沃・針塚進 2001 韓国の中学生における学校不適応の実態と認識。九州大学心理学研究, 2, 145-151.